

6月4日討論要旨（ことば、歴史、アイデンティティ：台湾映画『海角七号』をめぐる）

林礼釗（STA）

### Guiding Question

1990年代以降の台湾では、植民地時代をめぐる郷土の記憶が多く語られています。そこで注目したいのは、その語り手には日本人引揚者、日本語世代の台湾人ばかりでなく、戦後世代の台湾人も含まれているということです。三者の間で郷土をめぐる記憶はなぜ共有出来るのでしょうか。映画『海角七号』を事例としてそのプロセスを考察してみましょう。今回は講義の内容を踏まえて、台湾を中国や韓国と比較するなど、様々な視点から問題を考えてみてください。

討論では、主に以下の意見や問題が提起された。

1. 民間ではその記憶が親から子供に語り継がれる。そして、日本と台湾は相互に何となく良いイメージを持っている。そこにはメディアの影響も考えられる。また、台湾においては、日本統治時代を評価したり、美化したりすることがある。また、三者の間で外省人と本省人の違いが存在している。
2. 90年代以前は議論の場所や資料があまりなかったが、今は映画等文化的領域で日本人は台湾を知る機会が増えてきている。ただ、同じ記憶を共有できるかという点、まだそこまでは至っていない。同じ映画の観点からすれば、中国大陸では「中国は善、日本は悪」が強調されて、市民の日本に対する感情の描写はあまりない。台湾に比べて、知日の機会があまりなく、反日に傾いている。
3. 政治的問題から考えれば、従来の「反攻大陸」は現実的なものではなく、台湾人のアイデンティティはどうなるのかという問題意識が喚起され、「郷土教育」が出てきた。歴史の視点から見れば、近代的開発をもたらす日本の役割を認めるようになった。また、中国では、反日の映画が多く、その原因は日中の歴史的問題に関わっている。質問として、「改姓名」の問題を聞きたい。
4. まず、「郷土教育」の目的は何かを質問したい。「郷土教育」は統治を強化するためのものとしての一面もあるのではないかと。また、1940年代半ばから、たくさんの方が台湾に渡った。彼らは「外省人」ではあるが、台湾人意識が強くなっていき、他方、新しい世代の台湾人意識も強くなった。最後に「認識台湾」という議論が出てきたが、その教育の本当の目的は一体何か。

**担当教員の総括：**まず、「改姓名」の問題について、1930年代後半から「改姓名」運動が展開された。しかし、「改姓名」は「許可制」であって、強制ではなかった。日本語を話せるのがその条件である。日本統治時代後半になるとほとんどの台湾人が日本の名前を持つようになった。そして、「郷土教育」の目的は何かという質問については、ぜひレジュメに挙げている『「郷土」としての台湾』を参照してほしい。あと、日本と台湾の歴史記憶はどこまで共有できるのかという問題については、簡単に答えることができない。もちろん両者の間にはギャップが存在しているが、やはり以前よりそのギャップが少なくなっていると思う。これを一つ重要な問題提起としてさらに検証していく必要がある。また、今の台湾の外省人と本省人は日本統治時代の記憶を共有できるのかという質問については、今の若い世代の中では、両者の区別がなくなっており、ある意味では共有できると考える。日本統治時代を経験していない人でも、自分が住んでいる地域が日本統治時代を経験してきたことを台湾の歴史の一部であると理解しており、その意味では共有できると思う。言論の自由が拡大していく中で、記憶の語りも自由になっていくはずである。そうすると悪いイメージだけではなく、良い面も強調されるようになるだろう。